富山県南砺市

野丹保遺跡 II

―　県営ほ場整備事業（担い手育成型）吉江南部地区に伴う
埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(2)　―

2006年3月

南砺市教育委員会

序

富山県の南西部を占める南砺市には、世界遺産五箇山の合掌づくり集落をはじめ、すばらしい文化遺産が数多く残されています。また、埋蔵文化財についても、旧石器時代以来の北陸や富山の歴史を語るに欠かせない、重要な発見が多数なされている地域です。

吉江南部地区でも、県営ほ場整備事業に先立って遺跡の確認調査が行われた結果、古代から中世までの遺跡が発見され、多くの歴史遺産が埋蔵されている地域であることが明らかになりました。幸い遺跡のほとんどは、工事で失われることのないように配慮がなされ、田面下に保存されたまま後世に受け継がれていきます。施工上やむをえない区域については、工事前に記録保存の措置を講じています。

当地区におけるほ場整備事業関連の遺跡発掘調査は、平成10年度の試掘調査から始まり、野丹保遺跡４箇所目の本発掘調査となった今回の調査で一応の完了をみました。本書は本年の発掘調査結果をまとめたものです。郷土の歴史解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、富山県農林水産部、ほ場整備事業吉江南部地区委員会をはじめ地元住民の皆様方、南砺市シルバー人材センターに多大なご協力を賜りましたことを深く感謝するものであります。

平成１８年３月

南砺市教育委員会

教育長　梧　桐　角　也

例　　言

1．本書は、県営ほ場整備事業（担い手育成型）吉江南部地区に伴う、富山県南砺市野丹保遺跡４地区の発掘調査概要である。

2．調査は、富山県農地林務部の委託を受け南砺市教育委員会が実施した。調査のうち地元費用負担部分については、南砺市教育委員会が国庫補助を受けて行った。

3．調査は、南砺市教育委員会文化課長　上田一郎の総括のもとに、文化財係長　林　浩明が発掘調査を担当し、文化財保護主事　佐藤梨子、同　片田亜紀が調査事務を行った。

4．発掘現地作業員は南砺市シルバー人材センターに一括して依頼した。調査参加者は次のとおりである。
井沢佐太郎、金本幸作、北村尚明、中沢昭夫、中山政子、布見ハツ子、野　恭子、堀　外治、沿浅とみこ、吉井孝一、吉尾乾九、米田　穣（以上南砺市シルバー人材センター）
石崎三枝子、鍛治麗子、西川和美（記録作成および整理作業）

5．本書の作成は、林が行った。

6．本書で使用した方位は真北である。土層の観察には、『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社発行を用いた。

7．発掘調査の出土品および写真・図面等の調査記録は、南砺市教育委員会が一括して保管している。

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅱ　調査に至る経緯と経過 …… 3
　1．調査に至るまで
　2．調査の経過
Ⅲ　調査の概要 …… 5
　1．これまでの調査
　2．調査の方法
　3．層序
　4．遺構
　5．遺物
Ⅳ　まとめ …… 11

図1　位置図
図2　周辺の遺跡（1/25,000）
図3　野丹保遺跡調査区位置図（1/4,000）
図4　基本層位図
図5　遺構平面図（1/200）・土層断面図（1/100）
図6　遺構断面図（1/40）
図7　遺物実測図（1/2、1/4）

Ⅰ　位置と環境

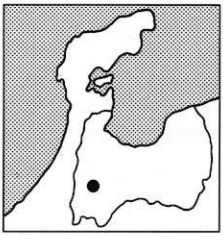


図１　位置図

南砺市は富山県の南西部に位置し、西側を石川県、南側を岐阜県との県境をなす。市の西側から南側にかけては、養老３年（719）、泰澄によって開山されたという霊峰（939m）をはじめとするなだらかな山脈が連なる。これらの山々から源を発する小矢部川が北に流し、その東を流れる支流の山田川とともに、南砺市南西部の平野を形成している。

野丹保遺跡は、小矢部川左岸に沿って南北に伸びる台地上にあり、標高約105～115m、南北400m、東西200mの広がりをもつ。台地は小矢部川とその支流によって侵食を受けた洪積層で、後期旧石器時代の遺跡も分布する。遺跡付近での段丘下面との比高差はおよそ10mである。

当遺跡の近辺には、縄文時代の遺跡として、小矢部川左岸に位置する縄文前期の両尖匕首（両頭尖頭器）が出土した天神遺跡、市指定文化財の土偶が出土した、縄文中～後期の竹林Ⅰ・Ⅱ遺跡、縄文前～後期の五瀬遺跡が存在する。当遺跡周辺では、昭和40年頃に一度ほ場整備が行われており、この際に南北朝期の五輪塔や宝篋印塔、珠洲等が出土している。下丹保遺跡、中丹保遺跡は、今回のほ場整備事業に伴い発見された古代から中世にかけての遺跡である。試掘調査では中世の土坑や柱穴が確認された。

宝性寺跡は、「嘉禎２年（1236）空潮がこの地に寺を建て「法性寺」と名乗った。のち文明９年（1477）教珍の代に蓮如に帰依して、天台宗から真宗に改宗して現在の地に移転し、その後『隋願寺」と寺名を改めた」という。現在も土塁跡らしき高まりを確認できる。中世の寺院跡としてはこのほか文殊院跡がある。また時宗本山に残る『時宗過去帳』には、鎌倉時代から室町時代にかけての越中の信者も多く記録されている。この中に高宮の人々も数名記されていて、このころの吉江道場（仏土寺）を中心とした時宗の広まりを示している。天文５年（1536）『越中國石黒郷最勝寺諸塔諸末寺領等之事』には「善光寺　高宮之内」という記述が見られる。昭和40年代に行われたほ場整備の際に、数多くの五輪塔や宝篋印塔など石塔類が出土した位置は野丹保遺跡の南東部にあたり、この付近に、上記の寺院跡関連遺構の存在を求めることができるものと考えられる。また、弘長２年（1262）3月の『関東下知状』によれば、すでに高宮で市が開かれていたことが知られ、中世前期にはすでに開発の進んだ地域であったようである。

このほか地域の特徴的な遺跡として、明治期に操業していた越中焼窯跡がある。このように、当遺跡周辺の小矢部川河岸段丘上は、縄文時代以降、中世を中心に多くの遺跡が存在する地域である。

1 野丹保遺跡　2 下丹保遺跡　3 中丹保遺跡　4 越中焼窯跡　5 宝性寺跡　6 荒木遺跡　7 梅原出村南遺跡
8 竹林II遺跡　9 神宮寺塚　10 竹林I遺跡　11 文殊院跡　12 吉江野遺跡　13 THJ-19遺跡　14 THJ-20遺跡
15 京塚　16 京塚B遺跡　17 京塚A遺跡　18 金戸館跡　19 中地山A遺跡　20 土生新遺跡　21 土生新経塚
22 有田ヶ原A遺跡　23 有田ヶ原B遺跡　24 有田ヶ原C遺跡　25 福満城跡　26 福光御蔵跡　27 福光巴塚
28 天神遺跡　29 五瀬遺跡　30 山本城跡　31 竹内II遺跡　32 竹内遺跡　33 竹内III遺跡　34 竹内IV遺跡
35 医王山千手堂跡　36 椋の宮跡　37 祖谷II遺跡　38 本敬寺跡　39 祖谷III遺跡　40 古館遺跡
41 婆々堂遺跡　42 香山寺跡　43 駅瀬堂遺跡

図2 周辺の遺跡（1/25,000）

Ⅱ　調査に至る経緯と経過

1．調査に至るまで

平成８年(1996)、福光町高宮・殿・土生新の３地区を含む吉江南部地区において、県営ほ場整備事業（担い手育成型）の実施計画が策定された。この事業は上記３地区、129haを対象に、平成10年度から15年度までを事業実施年としていた。

平成９年３月、事業の実施に先立ち、福光町教育員会が富山県埋蔵文化財センターから職員の派遣を受け、事業区域の分布調査を実施したところ、対象地区内において野丹保遺跡のほかに新たに２箇所の遺跡の存在が判明した。このため、福光町教育員会では、遺跡の所在する地区で工事が着手される前年の平成13年から15年にかけ、国庫補助金事業を受けて遺跡の範囲および性格を確認する目的で試掘調査を行った。調査の結果、遺跡の遺存状況が良好な箇所が多く確認されたことから、町教委は県農林水産部、県教育委員会、地元土地改良区と遺跡の保護措置について協議を行った。協議の結果、遺跡は原則として水田下に現状保存し、現状保存の困難な用排水路工事部分や一部の面工事部分について記録保存のため本調査を実施する事で合意した。

２．調査の経過　野丹保遺跡においては平成16年度（2005）から旧福光町教育委員会が本調査に着手し、合併により南砺市教育委員会が引き継いで今年が２年目となる。また、事業の進捗状況にかんがみ、調査の一部は教育委員会監理のもと、民間の調査会社に委託して行っている。各遺跡における調査経過はつぎのとおりである。

表１　吉江南部地区の遺跡概要（Ｎｏ.は図２の遺跡番号と対応する）

Ｎｏ.	遺跡名	所属時代	主な出土遺物
1	野丹保遺跡	縄文、中世、近世	五輪等、宝院
2	中丹保遺跡	古代、中世、近世	土師器・須恵器・中世土師器・陶磁器
3	下丹保遺跡	古代、中世、近世	珠洲・中世土師器
4	越中焼窯跡	明治	
5	宝性寺跡	中世（鎌倉・室町）	

表２　吉江南部地区年度別　試掘調査および本調査一覧

年　度	調査対象遺跡	試掘対象面積（ｈａ）	本調査面積（㎡）	検出遺構	出土遺物
H13	下丹保遺跡	５．４７	－	土坑・溝・ピット	
	中丹保遺跡	１．１７	－	土坑・溝・ピット	
H14	下丹保遺跡	２．９６	－	土坑・溝・ピット	
	中丹保遺跡	０．５３	－	土坑・溝・ピット	
	野丹保遺跡	８．００	－	土坑・溝・ピット	
H15	中丹保遺跡	６．９６	－	土坑・溝・ピット	
	宝性寺跡	０．７３	－	なし	なし
	越中焼窯跡	０．５４	－	なし	なし
H16	野丹保遺跡	－	2,860	土坑・溝・集石遺構	縄文土器・中世土師器、青磁、珠洲、陶磁器、五輪塔
H17	野丹保遺跡	－	2,086	土坑・溝・ピット	打製石斧、縄文土器、中世土師器、青磁、珠洲、八尾、近世陶磁器類

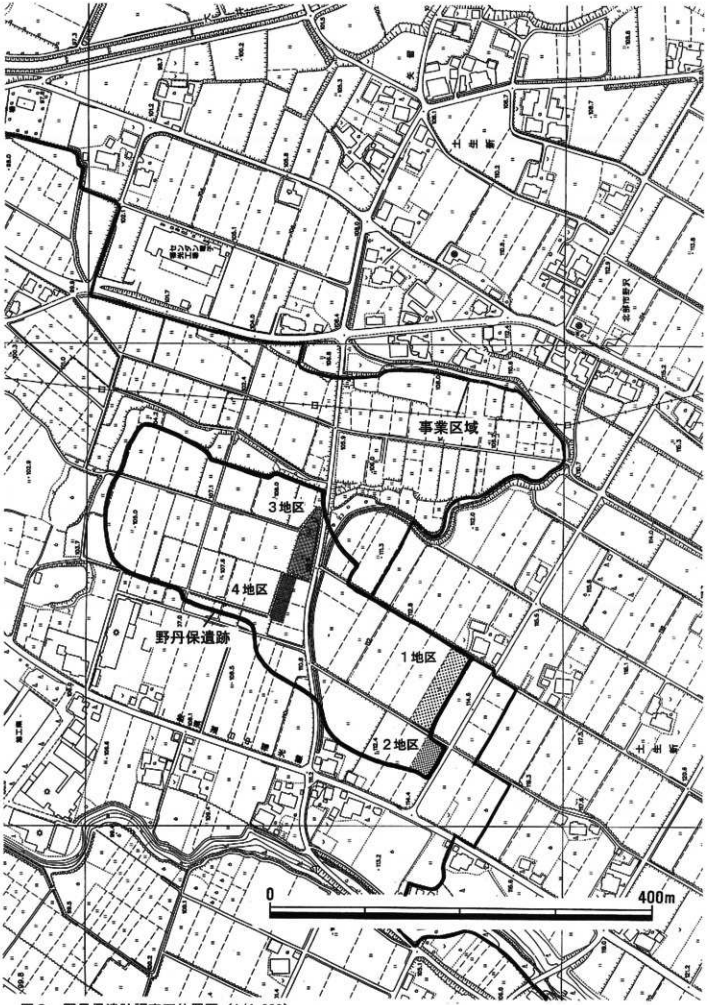


図3　野丹保遺跡調査区位置図（1/4,000）

Ⅲ　調査の概要

1．これまでの調査

野丹保遺跡では、昭和40年代に行われたほ場整備に際し五輪塔、宝篋印塔、珠洲焼などが出土したことから遺跡の存在が知られるようになった。今回のほ場整備事業に伴い、平成９年の分布調査および平成13年の試掘調査によって遺跡の広がりが確認され、工事の影響を受ける４つの地区が記録保存の本調査対象となっている。

平成16年度は１地区と２地区を、17年度は３地区と４地区を調査している（図５）。１地区では集石遺構、２地区・３地区では土坑と溝が主な遺構である。出土遺物量は総じて少なく、昭和40年代のような石塔なども出土していない。中世の集落跡とされているが、その性格は詳しくわかっていない。

なお、１地区と３地区は民間調査会社に委託して実施した。また、今回４地区の調査が野丹保遺跡における最終の調査区である。４地区の現地調査は、平成17年９月から10月にかけての１ヶ月間実施し、その後整理作業と本書の作成を行った。

2．調査の方法

調査区は、東西約50m、南北14mの長方形である。まず重機により耕作土除去作業を行った後、調査区長辺中央に十層観察用のあぜを残し、盛土層をさらに重機で取り除いた。重機作業終了後、調査基準杭の設置を行った。基準には隣接する３地区の座標を適用して10m方眼を設定した。10mに満たない場合には、整数mの最大値の位置に杭を打設した。

調査グリッドの設定後、人力によって包含層の掘削を開始し、遺構の検出作業後、遺構掘削と記録作業を行った。遺構の可能性のある対象には通し番号をつけ管理し、土層断面観察のうえ必要に応じて断面図の作成等を行った。土色については、農林水産省監修『標準土色帖』を用いた。

発掘完了後、ラジコン・ヘリコプターにより空中写真測量用写真の撮影を行い、あわせて全景写真、斜め写真撮影も実施した。空中写真から1：20平面図を機械図化作業によって作成した。

3．層序（図４）

本調査区における層序は、ほ場整備と農作業の影響により部分的に相違がみられるが、耕作土を除き基本的に３層である。上層から順に、第１層は黒褐色土層で、耕作土の基盤をなす層である。地山質ブロックを含む、前回ほ場整備が行われた際の整地層である。第2層は包含層であるが、ほ場整備の影響を受けたせいか残りは悪い。暗褐色土で若干炭化物を含み、下部は3層へ漸移的に移行する。第３層は地山層で、明るい黄褐色の強粘質土である。

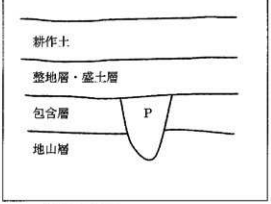


図４　基本層位図

4．遺構

検出遺構は、溝（ＳＤ）１、大小のピット・穴（Ｐ）が100あまりである。穴については、配置は不規則で、建物を構成するものはなかった。これらの穴の形成時期や原因は、検出状況や埋土の観察から、さまざまな要因があると考えられ、形状や断面形から木の根跡と見られるものが少なからず存在している。このため、平面で検出後、半截掘削して断面・形状の観察ののち、記録が必要と判断したものについて断面図を作成した。攪乱としたものは、埋土の観察から明らかに近年の掘削によるものと判断できたものであ

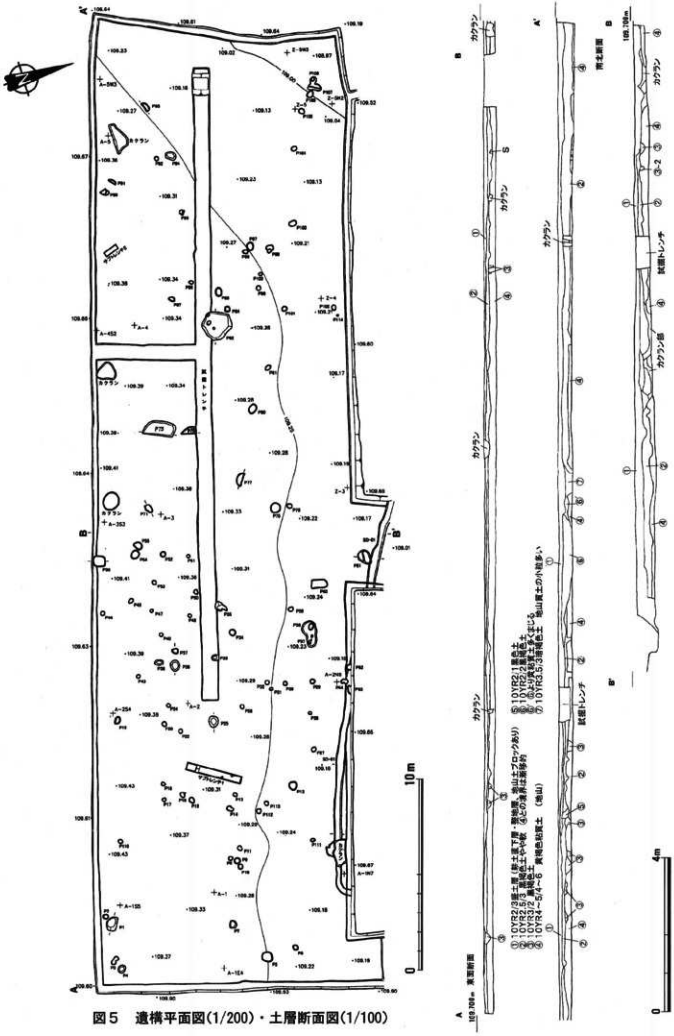


図5　遺構平面図(1/200)・土層断面図(1/100)

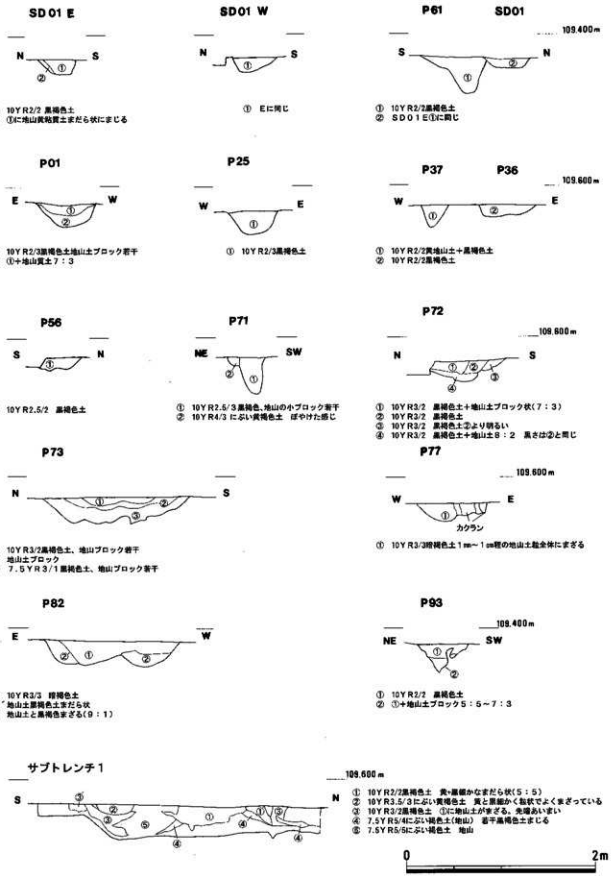

SD01 E
N
S
① 10YR2/2 黒褐色土
② ①に地山黄褐色土まだら状にまじる
SD01 W
N
S
① Eに同じ
P61
SD01
109.400m
S
N
① 10YR2/2黒褐色土
② SD01E①に同じ
P01
E
W
① 10YR2/3黒褐色土地山土ブロック若干
② ①+地山黄土7：3
P25
W
E
① 10YR2/3黒褐色土
P37
P36
109.600m
W
E
① 10YR2/2黄地山土+黒褐色土
② 10YR2/2黒褐色土
P56
S
N
① 10YR2.5/2 黒褐色土
P71
NE
SW
① 10YR2.5/3黒褐色,地山の小ブロック若干
② 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ぼやけた感じ
P72
109.800m
N
S
① 10YR3/2 黒褐色土+地山土ブロック状(7：3)
② 10YR3/2 黒褐色土
③ 10YR3/2 黒褐色土②より明るい
④ 10YR3/2 黒褐色土+地山土8：2 黒さは②と同じ
P73
N
S
① 10YR3/2黒褐色土、地山ブロック若干
② 地山土ブロック
③ 7.5YR3/1黒褐色土、地山ブロック若干
P77
109.600m
W
E
カクラン
① 10YR3/3暗褐色土1m～1m既の地山土粗金体にまざる
P82
E
W
① 10YR3/3 暗褐色土
② 地山土黄褐色土まだら状
③ 地山土と黒褐色まざる(9：1)
P93
109.400m
NE
SW
① 10YR2/2 黒褐色土
② ①+地山土ブロック5：5～7：3
サブトレンチ1
109.600m
S
N
① 10YR2/2黒褐色土 黄+黒褐かなまだら状(5：5)
② 10YR3.5/3にぶい黄褐色土 炭と黒褐かく粒状でよくまざっている
③ 10YR2/2黒褐色土 ①に地山土が混ざる。赤味あいまい
④ 7.5YR5/4にぶい褐色土(地山) 若干黒褐色土まじる
⑤ 7.5YR5/5にぶい褐色土 地山
0
2m

図6 遺構断面図（1/40）

検出ピット・穴一覧

No.	長径	短径	深さ	検出高	底面	備考	No.	長径	短径	深さ	検出高	底面	備考
	cm			m				cm			m		
P01	76	42	0.28	109.43	109.15		P58	75	67	0.22	109.22	109.00	
P02	28	24	0.24	109.44	109.20		P59	30	24	0.13	109.23	109.10	
P03	38	18	0.25	109.44	109.19		P60	85	44	0.12	109.21	109.09	
P04	42	38	0.08	109.42	109.34		P61	77	65	0.11	109.17	109.06	
P05	60	54	0.24	109.27	109.03		P62	32	26	0.26	109.14	108.88	
P06	30	26	0.14	109.21	109.07		P63	42	18	0.17	109.05	108.88	
P07	40	38	0.20	109.28	109.08		P64	38	21	0.26	109.13	108.87	
P08	23	24	0.13	109.31	109.18		P65						欠番
P09	33	31	0.24	109.31	109.07		P66						欠番
P10	27	25	0.12	109.29	109.17		P67						欠番
P11	29	24	0.15	109.31	109.16		P68						欠番
P12	46	44	0.29	109.22	108.93		P69						欠番
P13	22	19	0.09	109.27	109.18		P70						撹乱
P14	38	24	0.31	109.28	108.97		P71	47	27	0.13	109.39	109.26	
P15	34	26	0.23	109.31	109.08		P72	42	40	0.22	109.34	109.12	撹乱
P16	30	30	0.11	109.22	109.11		P73	90	90	0.33	109.39	109.06	撹乱
P17	20	20	0.11	109.36	109.25		P74						撹乱
P18	24	20	0.17	109.36	109.19		P75	54	53	0.07	109.27	109.20	
P19	41	29	0.26	109.41	109.15		P76	30	27	0.24	109.26	109.02	
P20	26	23	0.22	109.37	109.15		P77	72	33	0.24	109.34	109.10	
P21						欠番	P78						撹乱
P22	24	21	0.20	109.37	109.17		P79						撹乱
P23						欠番	P80	53	39	0.11	109.26	109.15	
P24	22	20	0.19	109.37	109.18		P81	37	24	0.25	109.27	109.02	
P25	58	51	0.25	109.33	109.08		P82	160	146	0.28	109.28	109.00	
P26	25	21	0.23	109.29	109.06		P83						欠番
P27	28	23	0.09	109.19	109.10		P84	28	27	0.22	109.26	109.04	
P28	21	18	0.13	109.18	109.05		P85	48	35	0.28	109.28	109.00	
P29	27	27	0.23	109.18	108.95		P86	24	20	0.19	109.31	109.12	
P30	24	23	0.17	109.23	109.06		P87	36	25	0.24	109.32	109.08	
P31	20	16	0.19	109.25	109.06		P88						撹乱
P32	24	23	0.19	109.26	109.07		P89						欠番
P33	49	30	0.36	109.32	108.96		P90	38	28	0.12	109.38	109.26	
P34	37	35	0.20	109.33	109.13		P91	44	15	0.22	109.37	109.15	
P35	71	43	0.26	109.31	109.05		P92	24	22	0.17	109.28	109.11	
P36	60	50	0.12	109.38	109.26		P93	51	35	0.18	109.22	109.04	
P37	33	29	0.25	109.39	109.14		P94	56	40	0.11	109.26	109.15	
P38	47	28	0.23	109.39	109.16		P95	25	23	0.10	109.28	109.18	
P39						38と連結	P96	30	22	0.10	109.27	109.17	
P40	22	20	0.17	109.38	109.21		P97	44	37	0.23	109.27	109.04	
P41						欠番	P98	43	22	0.23	109.27	109.04	
P42						欠番	P99	44	36	0.12	109.26	109.14	
P43	22	20	0.19	109.39	109.20		P100	21	19	0.11	109.25	109.14	
P44	23	22	0.18	109.43	109.25		P101	29	24	0.14	109.23	109.09	
P45	32	21	0.14	109.38	109.24		P102	29	23	0.25	109.16	108.91	
P46						45と連結	P103	42	29	0.26	109.17	108.91	
P47	20	16	0.13	109.37	109.24		P104	32	23	81.10	190.12	109.02	
P48	22	20	0.20	109.36	109.16		P105	33	29	0.24	109.06	108.82	
P49						欠番	P106	42	30	0.16	109.01	108.85	
P50	28	22	0.17	109.34	109.17		P107	74	15	0.18	108.97	108.79	
P51	22	19	0.14	109.36	109.22		P108	56	30	0.20	108.96	108.76	
P52	32	29	0.16	109.38	109.22		P109						欠番
P53	25	21	0.17	109.38	109.21		P110	26	22	0.13	109.41	109.28	
P54	49	41	0.11	109.39	109.28		P111	26	19	0.20	109.18	108.98	
P55	46	37	0.08	109.39	109.31		P112	27	25	0.17	109.22	109.05	
P56	64	55	0.20	109.41	109.21		P113	26	22	0.20	109.23	109.03	
P57	60	53	0.07	109.19	109.12		P114	12	8	0.12	109.16	109.04	

る。以下に主な遺構の概要を記す。

ＳＤ01

調査区の北東部にあり、東西に伸びる。幅30cm、深さ20cm前後をはかる。延長約20mを検出した。調査区中央に設けた断面観察あぜよりも西で調査区の外に出てのびる。一方、東端では北に90度屈曲しこれも調査区外となる。溝内からの出土遺物は土師器の細片が１点あるが、遺構の年代を決めることは困難である。

Ｐ１　東区南東隅にあり、76×42cm、深さ28cmを測る。黒褐色の埋土は２層に分かれ、地山質のブロックを上層で若干、下層ではやや多く含む。出土遺物はない。

Ｐ25　東区試掘トレンチの東外側にあり、58×51cm、深さ25cmである。埋土は混り気のない均質な黒褐色を呈する。

Ｐ36・37　東西に隣接する穴で、東に位置するＰ36が60×50cmの楕円形、Ｐ37が径約30cmの円形を呈する。深さは36が12cm、37が25cmを測る。36の埋土は均質な黒褐色土、37の埋土には地山の黄色土ブロックが混じる。出土遺物はない。

Ｐ56　東区の南西隅にあり、平面形は60×50cmの隅丸方形、底面も平らである。黒褐色の均質な埋土である。埋土からの出土遺物はないが、機械掘削時に上層で八尾の甕（図－8）が出土している。

Ｐ61　東区北西隅にあり、北側をＳＤ01に切られている。77×65cmの楕円形で深さ42cm穴の形は不正形である。埋土は黒褐色で均質、出土遺物はない。

Ｐ71～73　埋土に地山質ブロックを3～５割り含む。ブロック土は個々の輪郭がシャープで埋まってから日が浅い。近年の農作業等に伴う攪乱であろうと判断した。

Ｐ77　72×33cm、暗褐色土に数ミリから１cm程度の地山土が粒状に混ざった状態である。深さは24cm。

Ｐ82　試掘時にも検出されている穴で、160×146の円形を呈し、深さは現状で28cmである。埋土は暗褐色土が主で、地山土と黒褐色土が若干混じる。出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

Ｐ93　円錐形に近い断面をもち、地山へ細長く食込む凹凸を生じているため、木の株跡であろう。

サブトレンチ１　外周は黒褐色土で、中央が地山質土となっている、径２～４m程度の円ないし楕円状のものが不規則に分布する。この１つを断ち割り断面観察を行ったが、人為的に作られたものではなく、いわゆる風倒木の痕跡と考えられる。

５．遺物

本調査においては、縄文時代以降、近・現代にいたる幅広い時代の遺物が出土している。しかしその量はごくわずかである。

遺構出土の遺物としては、ＳＤ01から土師質の土器と近世陶磁が各１点、Ｐ100の土師器が1点あるが、いずれも図化できない細片であり、遺構の年代や性格を決める手がかりになるものではない。その他は盛土、包含層からの出土である。

１は縄文土器である。小片であるが、中期の特徴がうかがえる。かすかに縄目が残っている部分がある。２も胎土からみて縄文土器の可能性が高い。３は打製石斧で、試掘トレンチの埋土から出土した。刃部と基部の間にくびれを作らない、いわゆる短冊型のものである。ほぼ完全な形で重さは235ｇを測る。４は須恵器甕の胴部片である。５は土師器皿の口縁部である。６は八尾の甕と見られる。同一固体と見られる破片が調査区中央付近でまとまって出土している。Ｐ56上部の包含層でも出土しているが、Ｐ56との関連は不明確である。

７・８は近世以降の陶磁器である。このほか、鉄石英のこぶし大角礫が１点出土している。調査区内には礫がほとんど出ないので、人為的に持ち込まれたものと考えたいが、加工等の痕跡は認められない。

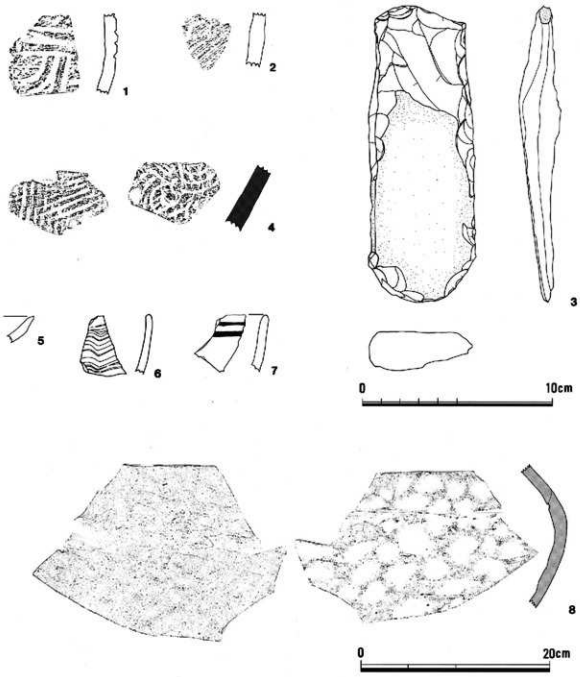


図7　遺物実測図（1/2・1～7，1/4・8）

Ⅵ　まとめ

今回検出した遺構は、溝状遺構及び１ピット状遺構およそ100である。ピットの分布には特に規則性は認められなかった。またその成因も必ずしも意図的に形成されたものとは言えない。隣接する３地区の調査では、北東部がこの地方特産の干し柿の渋柿園となっていたためか、地山面に撹乱を受けた部分がいくつも確認されている。溝状遺構ＳＤ01では、溝内からの遺物は近世陶磁の小片が1点ある。埋土の状況から見ても、近世以降に、耕作等に伴って使用されていたものであろうと考えられる。

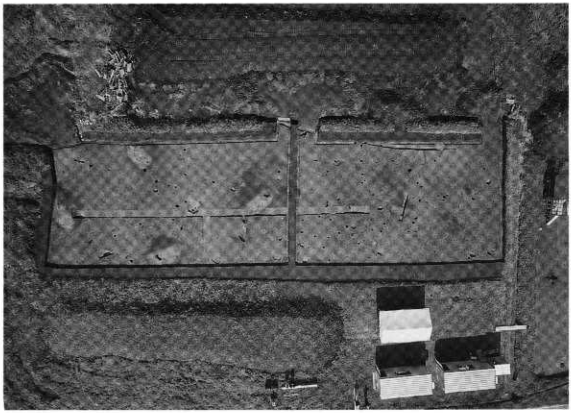
遺物は、縄文土器、打製石器、八尾、中世土師器、近世陶磁器までと幅広い年代のものが主に盛土層から出土しているが、その量はごく僅かである。東に接する３区の結果もほぼ同じである。

遺物の量が非常に少ないことは、この場所が、人々が日常生活を営んだ集落跡をはずれた農業生産の場であったために、もともと遺構・遺物量が少ない場所であったと考えられる。さらに、前回ほ場整備が行われた際に、包含層が削平を受けたことによって、いっそう遺物の密度が低下したものと考えられる。遺物の多くは盛土層から出土の細片であったので、遺構・調査区の年代を決定し、その性格を考えるための判断材料としては、残念ながら不十分なものと言わざるを得なかった。

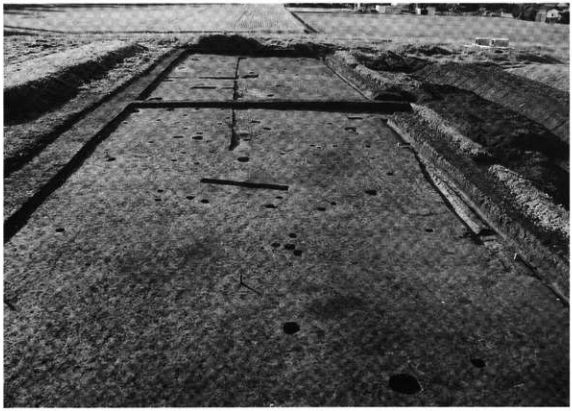
参考文献

『福光町史』福光町史編纂委員会編1971
『古江の昔と今』編集委員会編1979
『医王は語る』医王山文化調査委員会編1993
『野丹保遺跡』Ⅰ　南砺市教育委員会2005

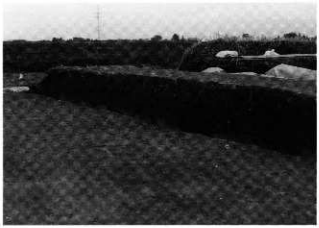
調査区遠景（西から）



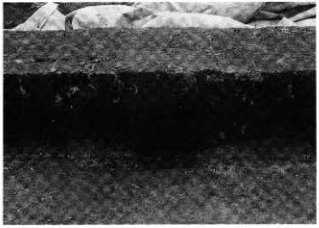
全景写真（垂直）



全景写真（東から）



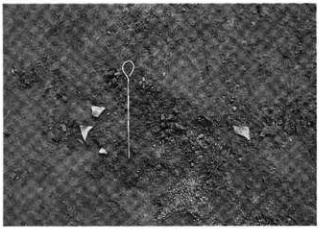
土層断面（南北あぜ北）



土層断面（南北あぜ中央）

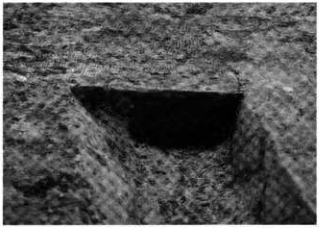
遺構検出状況（P57・58）

遺構検出状況（P56）



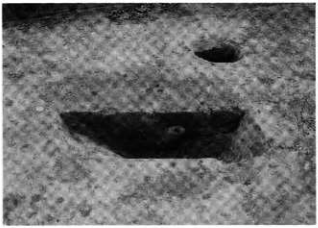
遺物出土状況

ＳＤ01（東から）

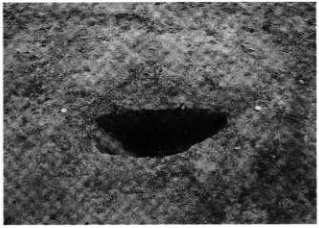


ＳＤ01断面（東）

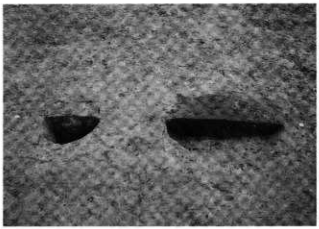
ＳＤ01断面（西）



P01断面



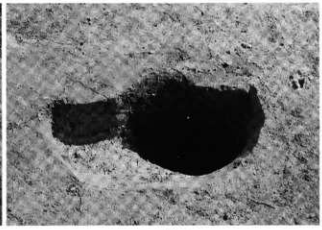
P25断面



P36・37断面

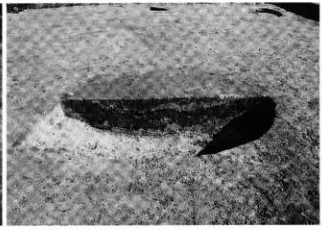
P56断面

P61断面

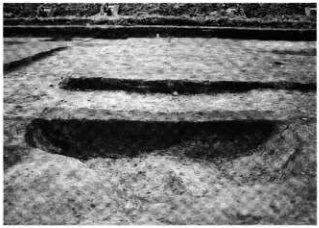


P71断面

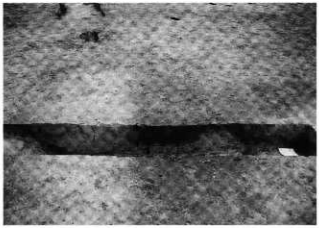
P72断面



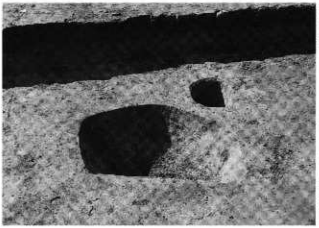
P73断面



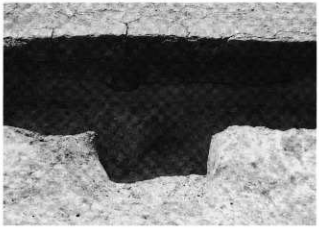
82断面



サブトレンチ1

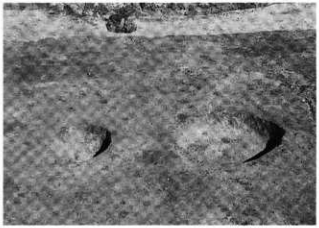


P01・02（西から）



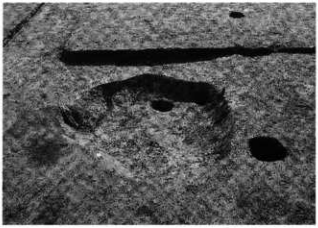
P56（西から）

P25（南から）

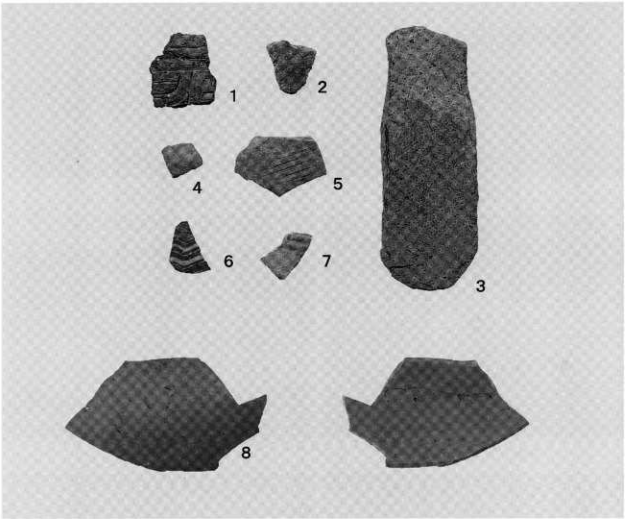


P36・37（南から）

P61（南から）



P82（北から）



出土遺物

着手前

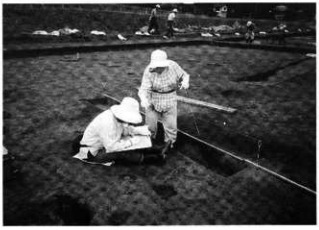
機械掘削

基準杭設置

レンタル機材等

遺構検出

遺構発掘（ＳＤ01）



断面実測（サブトレ１）

ラジコンヘリ空撮

報 告 書 抄 録

ふ り が な	とやまけんなんとし　のたんぼいせき　に
書　　名	富山県南砺市　野丹保遺跡　Ⅱ
副　　題	県営ほ場整備事業(担い手育成型)吉江南部地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(2)
シリーズ名	南砺市埋蔵文化財調査報告書15
編 著 者 名	林　浩明
編 集 機 関	南砺市教育委員会
所　在　地	〒939-0292　富山県南砺市井波520　TEL(0763)23-2014
発行年月日	西暦2006年3月15日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
野丹保遺跡	富山県 南砺市高宮	16210	413	36度 32分 13秒	136度 52分 13秒	040802 ～041213	705	県営ほ場 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野丹保遺跡	集落	縄文 中世～近世	溝、土坑、ピット	縄文土器、打製石斧 八尾、瀬戸、伊万里	

県営ほ場整備事業（担い手育成型）吉江南部地区
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(2)

富山県南砺市　野丹保遺跡Ⅱ

平成18年３月15日
編集・発行　南砺市教育委員会
印　　刷　㈱山田雲煙堂印刷所